里山を活用した環境教育の取り組み
—大学間里山交流ネットワークの形成—

高桑　進

はじめに

平成20年（2008年）度は里山学ORCのプロジェクトも最終年度に入るので、過去の報告書の内容を振り返りながら、私が担当してきた環境教育の取り組みの自己評価と大学里山交流ネットワークの展望等について述べてみたい。

私は4年前の2004年度報告書（p.206）に、『———。やはり、里山という「森の力」が一人一人の学生達に大きな影響を与えたことが理解できる。その意味で「里山を活用した環境教育」はこれからの新しい教養教育の展開にも役立つような気がするし、大学生達が日本の自然環境のすばらしさ、すなわち生物多様性を実感し、ひいては21世紀の地球環境問題を意識するきっかけになれば「里山学」が目指す目的の一端が達成できるのではないかと思えるのである』（アンダーラインは筆者）と述べたが、ますますすこれからの大学における教養教育の一つとして体験型の環境教育は重要であると確信している。

生物多様性については、今まであまり注目されてこなかった。「生物多様性」はもともと「Biodiversity」の訳語だが、わかりにくいとのことで「生き物のにぎわいとかかわり」とも表現される。しかし、2010年に生物多様性COP10を日本（愛知県）に誘致しようとする動きがあり、その中で生物多様性の重要性を「生態系サービス」として理解していくようだ。各地の里山に特徴的な生き物分布・利用地図（生活とのかかわり）やグリーンマップづくりに取り組むことで、子ども達に「生態系のサービス」とは何かを具体的に伝えたい。

ただし、私の基本的な考えは、「生物多様性」は21世紀の日本の社会が安全で健康な食料を自給できるように自然と関わることでもたらされる「おまけ」であると考えている。一昨年行われた国際シンポジウムでも、私達が今楽しんでいるアルプス地方の

SATOYAMA的景観は人間活動のおかげで形成されたものであり、農民がその形成者であると高名な教授が述べられたことは記憶に新しい。つまり、生物多様性を維持するための農・林・漁業というのはあっても良さそうであるが、本末転倒ではないかと思うのである。

2005年度の報告書（p.247）では、『このような体験学習としての里山保全や里山交流を通じて、大学生が里山の歴史や日本の農業・林業のおかれている厳しい現状について目がいくようになれば喜ばしい。環境教育の目的は、問題点に気づき、関心を持ち、解決策を考え、行動を変えていくことである。里山を活用した新しい環境教育とは、里山を訪れることで「里山と人とのつながり」に気づき、関心を持ち、自分たちが関われることを見いだして行動してゆける学生達を育てることを目的としている。その目的のために、全国の大学に里山を活用した授業科目が増えることを期待する』（アンダーラインは筆者）と述べたが、我が国の農林業はご存じのように今や「限界集落」と呼ばれる地域に支えられおり、崩壊寸前であるともいえる。　しかし、このような山村や農村の現状とその問題点について里山を通じた学生交流を通じて伝えてきたかといえば、まだまだ課題が多い。その意味で、昨年度の12月に龍谷大学で実施した「吉野杉の割り箸づくり」体験学習等を通して林業の現状を学ぶための林業体験インターンシップ活動プログラムの開発に取り組む計画である。この環境教育活動を「箸一本の革命」と呼びたい。

「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」（環境保全活動・環境教育推進法）が2003年10月に施行され、2005年には日本の提案で「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」が国連において採択された。2005年～2014年までを「持続可能な開発のための教育の10 年」と定め、国連の下で、政府、各国機関、団体、企業等が主体間で連携を図りながら、教育・啓発活動を行う。このような法律の施行を背景に、今後は大学だけでなく社会（行政、各種団体など）や企業などが連携し体験型で実践的な環境教育活動が盛んになると考えられる。全国の各大学においても、環境教育を単なる学習意欲の低下した学生の動機付けや導入教育として利用するに留まらず、21世紀の持続可能な社会を作り上げてゆける問題解決能力を身につける教養教育として位置づけるようになってきた。この龍谷大学の里山学ORCでは、「里山を活用した新しい環境教育～大学間里山交流ネットワークの構築」を通じて、これから全国の大学にモデルとなる新しい環境教育プログラムを作り上げてゆくことが出来ると考えている。そのためには、各団体、組織間はもちろん研究スタッフ間でのさらなる緊密な連携

と協力体制が求められている。

また、『里山を通じた新しい環境教育の取り組みは4大学間だけでなく、今後は広く他大学にもその輪を広げてゆきたいと考えている。その意味で、2006年度から名古屋にある中部大学も4大学里山交流会の輪に参加されることになるのは大変嬉しい限りである。』と述べたが、昨年度から長野大学もこのネットワークに参加表明され、森を所有する大学間での学生交流が一段と深まることが期待できる。今後は、各大学の学生達が自主的にネットワークづくりをして、Web上で意見の交換などが出来るようになれば嬉しい限りである。私は、今でも里山の持つ「森の力」が学生達の意識と行動を変容することが出来ると信じている。

2006年度の報告書（p.242）でも述べたように、台湾、韓国、中国などのアジア地域における大学間交流ネットワークの構築を目指している。そのためには、日本の学生達がもっともっと日本列島の里山の素晴らしさ（里山の生物多様性）を直接体験し、アジアに発信してゆける表現力を身につけて欲しいし、安全で健康的な社会を作り上げるための農業や林業の問題解決策を提案できる力もつけて欲しいと考えている。

1．大学間里山交流ネットワーク活動報告

1.1　中部大学での大学間里山交流会の報告

9月1、2日と名古屋市鶴舞にある中部大学名古屋キャンパスで行われた。以下にその内容を述べる。（カラーページ p.32　写真1、2、3参照）

――――――――――開会のあいさつ（中部大学教授　寺井久慈）――――――――――

昨年は中部大学専門講座・5大学間里山交流セミナー「里山共生考現学～里山を環る未来」では大変お世話になりました。お陰様で里山に対する市民の関心が高まる中で、昨年10月下旬に第2回土岐川・庄内川源流森の健康診断が217名の参加で実施されました。中部大学からは卒業生も合わせて60名が参加し、一般市民はもとより学生の森に対する関心も高まってきています。今年の第3回土岐川・庄内川源流森の健康診断に向けてチームリーダーを務めるべく夕立山森林塾に積極的に入塾する学生も出て来ました

交流会プログラム

日時：2007年9月1日（土）～2日（日）　エクステンションセンター後援

9月1日（土）13：00～16：30　中部大学名古屋キャンパスにおける公開講演会

13：00～14：00　「里山における生態系定量評価技術」

清水建設技術研究所主任研究員 米村惣太郎氏

14：00～15：00　「中部地域におけるESDの活動拠点づくり」

中部大学応用生物学部講師 上野薫氏

15：15～16：30　各大学における里山活動の取組み　　各大学からの報告：各15分

中部大学恵那研修センター（JR中央線武並駅）へ移動

9月2日（日）　8：00　朝食

9：00～12：00　中部大学恵那キャンパスの自然観察

12：00　昼食

13：00～16：30　学生リーダーによる「森の健康診断」

16：30　解散予定

里山交流会での発表

○京都女子大学「生命環境研究会」の主な活動内容

京都女子大学2回生・生命環境研究会　松下麻利子

これから、京都女子大学「生命環境研究会」の活動について発表を始めさせていただきます。

私たち生命環境研究会は、担当教授である高桑進先生のご指導を得ながら、現在、学生10名で活動しています。週に1.2回、高桑先生の研究室に集合し、30分～1時間ほど話し合いを行います。会が発足したのは、10年ほど前で、これまでに様々な活動を行ってきました。

そのなかでも、長年にわたって続いている活動が「京女の森」の自然観察会です。大学が所有する京都大原地区の森に、毎月、自然観察会に出かけています。今年5月の自然観察会では、昨年の5月に掛けておいた20個ばかりの巣箱を観察し、中に小さな卵が

あるのを確認しました。また、その他にも、シャクナゲや可愛らしいピンクの花と、倒卵形の長楕円形の葉が特徴のクリンソウ、イヌブナの新緑の葉っぱ、ヒメザゼンソウの大きな葉、ホウノキの芽吹き等、数多くの植物を観察することができました。

6月3日には田植え体験をしました。天候は曇りでしたが、2反近い水田に入り、田植えをしました。龍谷大学の学生さんの参加もあり、作業は約一時間半で終えることができました。

この他、野菜の栽培にも取り組んでいます。5月上旬、大学敷地内にある教材園の畑を耕し、肥料を撒き、畝を作りました。畑を耕す作業のときに、固まってしまった大きな土の塊を手でほぐして、細かくしたり、畝を作ったりする作業を通して、畑仕事の大変さ、難しさがよくわかりました。畑には、その後キュウリやトマト、ナス、ニガウリ、ブルーベリー等を植えました。

7月には、龍谷大学の「きのっ子」との交流として祇園祭に浴衣を着て出かけました。当日は、京都女子大学近くのスローフードの店で食事をしながら、交流会を行い、その後、祇園祭に出かけました。互いの活動について発表し、学生同士が交流するよい機会になりました。

8月4日には、東海シニア自然大学の26名を、（先ほど紹介いたしました）「京女の森」に案内しました。

今後の活動としては、「龍谷大学の森」への訪問、9月末の台湾花連大学での高桑先生の講演、「環境フェスティバル2007」への参加を予定しています。

1）「京女の森」（京都市左京区大原尾越町）での自然観察会（毎月1回）（カラーページ p.32　写真4参照）

～春の観察会～　4月8日（日）：春の森ウォッチング
　　5月13日（日）：新緑と野鳥ウォッチング

｛観察できた植物：ヒメザゼンソウ、シャクナゲ、クリンソウ、クロモジ、アケビ、イヌブナ、ホウノキ、ウリハダカエデ、ムラサキケマン等｝

～夏の観察会～　6月10日（日）：樹や草の花ウォッチング
　　7月8日（日）：夏の森ウォッチング

～秋の観察会～　10月14日（日）：秋の森とキノコウォッチング

11月11日（日）：初冬の森ウォッチング

2）田植え体験活動　今年度は6月3日（日）実施

場所：京都府八幡市川口　参加人数：約100名

3）野菜の栽培活動（5月～現在）　活動場所：大学構内の理科教材園

野菜の種類：ナス、トマト、キュウリ、ニガウリ、マクワウリ、ブルーベリー

4）龍谷大学「きのっ子」との交流会：祇園祭に浴衣で参加（7月13日（金））

5）「京女の森」での自然観察会（8月4日（土））

案内人：高桑進教授（京都女子大学）、綱本逸雄氏（地名研究家）

参加者：東海シニア自然大学から26名、本学学生3名

【H19年度　今後の活動予定】

1）龍谷大学「龍谷の森」への訪問

2）台湾花連大学での環境教育学会参加（講演者：京都女子大学　高桑進教授）

3）「京都環境フェスティバル2007」への参加（12月8日（土）、9日（日））

1.2　台湾花連大学における環境教育に関する講演活動

2007年の9月29、30、31日には、台湾の花連大学で開催された台湾環境教育学会に招聘され、基調講演「里山を活用した日本における環境教育の取り組み」を行い、20年近く実践してきた京女の森での生命環境教育の紹介と大学間交流ネットワークの紹介を行った。台湾の大学では環境教育に大変力を入れており、各大学には環境教育研究所が置かれているところが多い。また、食堂では若い女性が「マイ箸」を持参して使用していたのには、事前に聞いてはいたものの、いささか驚かされた。国立の大学のキャンパス内には、生ゴミのコンポスト化場、雨水利用施設、太陽光発電施設などエコライフに必要な施設が設けられているという。学会のエクスカーションで、花連県で行われている無農薬農業を視察する機会（カラーページ p.32　写真5参照）に恵まれた。

1.3　龍谷大学における大学間里山交流会

12月15、16日は、里山交流会 in 龍谷大学が行われた。15日は里山シンポジウムの後、龍谷荘に宿泊して、大学生間での交流をした。16日の午前中は、しめ縄づくりとマイ割り箸づくりを行い、午後2時から龍谷の森に出かけた。全員で龍谷の森の中を散策

して、自然観察を楽しみ学生交流を深めた。

1.3.1　里山シンポジウムの内容

テーマ：「瀬田山会議－大津の里山の過去と未来」

日時：2007年12月15日（土）午後1時～5時半（終了後パーティーあり）

場所：龍谷大学瀬田学舎　4号館209教室

1.3.2　参加した学生達の感想集　～しめ縄づくりとマイ割り箸づくり体験を含む～

（1）大学間里山交流会の感想

京都女子大学現代社会学部現代社会学科1回生　島林あずさ

近年、「環境問題」は頻繁にマスメディアに取り扱われるようになり、以前と比較しても、ずいぶんと注目度が上がってきているように感じます。今や企業も、環境への配慮無くしては経営が成り立たないのではないかと思われるまでになりました。しかし依然として、私の家族や友人など、私も含めた大部分の市民は、環境問題が遠い世界の問題であると考えがちです。その原因は、山に行かなくなった生活に起因するのではないかと考えられます。昔は里山があり、そこで人々は生活を送っていた、山からの恵みを直接感じていたからこそ、具体的な問題として捉えることができていたのではないかと思います。

その観点において、今回の瀬田山会議（大津の里山の過去と未来）は大変、意義のあるシンポジウムであったと思います。中でも特に印象に残っているのは、蔭山歩さんによる「瀬田・田上鳥瞰絵図について」です。ご自身の成安造形大学住環境デザインクラスでの知識を活かし、地域に根ざした活動によって誕生した鳥瞰絵図は、デザイン的に見ても、とても美しく、その地域の独自の歴史や文化が感じられました。鳥の目線で描かれた地図は、人間の目にも情報を伝えやすく、瀬田山を身近なものにしてくれたのだと思います。箇所によっては、私の知識不足もあり、難しく感じられる内容もありましたが、自分の得意分野で楽しみながら、環境問題に携わっていく姿勢を学ぶことができたように思います。その他にも、古文書から見た里山の歴史や、写真による龍谷の森の生物多様性の紹介など、

多種多様な自然との関わり方を拝見し、自分はどの方面から環境問題にアプローチをしていきたいのか、していけるのかを考える良いきっかけとなりました。

私の通う京都女子大学も、「京女の森」を持っています。私は未だ二度しか訪れたことがありませんが、もっともっと京女の森に足を運び、この森の生態系や歴史などについて知っていきたいです。また、最近は特に日本の文化に興味が湧いてきているため、文化についても学んでいきたいと考えています。そして得た知識をより多くの人に伝え、頭ではなく、体で感じて欲しいと思います。それが今の私がしたいこと、できることであると思うからです。

（2）大学間里山交流会の感想

京都女子大学現代社会学部1回生　福田藍実

12月15日に龍谷大学で行われた環境シンポジウムに参加しました。入り口には、たくさんの掲示物がありました。里山サークルの方たちは、山に生えているたくさんの植物や木の見本、蛇やイタチの剥製などを展示していました。どこの団体かは忘れてしまいましたが、里山のすばらしいスケッチを掲示されているところもありました。

シンポジウムの参加者のほとんどは年配の方でした。5・6人の方が交代に里山についての発表をされました。鳥瞰図からみた里山について発表された方や郷土資料から読み取れる里山について発表された方、春夏秋冬の山の風景をスクリーンに映し出し発表された方など、それぞれ違った角度からみた里山についての発表が行われました。とても詳しく調べられており、里山についてほとんどといっていいほど知らない私にとって、難しく感じました。

その中で、私の印象に残ったのは、幼い頃の経験を交えながら話された話です。昔は、冬が近づくと家族で山に入り、燃料となる木をたくさん切っておき、冬を越したそうです。また、山にはたくさんの松茸が生えていたので、よく食べており、今ほど松茸は貴重とされていなかっと話されていました。昔は、生活の一部に山があったということです。文明の発達により、人が生活に山を必要としなくなったと話されました。聞いていて驚く部分もあり、共感できる部分もたくさんありました。シンポジウムに参加したことで、今までの私には無かった知識がつき、山と人間の在り方について考えるようになりました。若い世代の人に、もっともっと聞いてもらいたいと思いました。

次の日に行われた“しめ縄作り”と“マイ箸”作りは、初めての体験でした。自分で作れるものだと思っていなかったので、どのように作るのか楽しみにしていました。どちらともとても楽しく、いい経験になったと思います。自分の力で作れたことが本当にうれしかったです。またこのようなシンポジウムがあった時は、ぜひ参加したいと思います。

（3）大学間里山交流会に参加して

京都女子大学家政学部食物栄養学科3回生　井上紗希

きのっこの学生とは今までも、山へ行ったり、活動をしたりしてお互いの活動内容を知っていましたが、共存の森の方とは初めてだったので交流ができてよかったです。地域の活動などに積極的に参加されたり、自然の中での活動をされたりしていることを知りました。里山や地域との関わり方にはいろいろあり、たくさんの方がさまざまな形で活動されていると思いました。里山や自然環境について考え、お互いに情報交換をし合い一緒に活動するなど、これからも交流ができたら良いと思います。

しめ縄作りは、昨年もやったのですが、縄をしめていくのは手の使い方が難しく、なかなかうまくできませんでした。何度もやり直しているとわらがぼろぼろになり、しめ縄作りの大変さを実感しました。苦戦している人が多かったですが、必死に頑張りました。お正月にしめ縄を飾る家が多く、買えばすぐに手に入るものですが、自分で作れないものではないと思います。私は、作ることを楽しめたし、自分が作ったものを飾れるということもうれしく感じました。ごへいの作り方も教わり、満足のできるしめ縄になりました。また来年も作りたいと思います。最近ではわらを手に入れられることが少ないかもしれませんが、手作りのしめ縄を作る機会ができれば良いなと思います。

マイ箸づくりは初めての体験でした。使った木は杉で、とてもよい香りがしていました。細いお箸をうまく作れるのかと思いましたが、小刀と丸かんなを使ってうまくできました。真ん中がふくらんだ「らんちゅう」という形のお箸で、削るのにとても集中し、思ったよりも疲れる作業でした。細さの加減が難しかったですが、手作り感のあるものが出来上がりました。割り箸を作る木は、木材にした廃材の利用だと高桑先生から聞きました。割り箸はもったいないと言いますが、廃材の利用であると考えるともったいないわけではないそうです。本当にそうなのかは私自身これから考えてみたいことと思います。お箸も買えば簡単に手に入りますが、一つ一つを作る作業は大変だと感じました。

しめ縄作り、お箸作りを通して、手作りの大変さ、良さを実感しました。どちらも、作り方を教われる機会はなかったので、良い機会になり、他の参加者と楽しく作れたことも良かったです。

昼からは龍谷の森の散策に行きました。歩いているといろいろな自然の変化を見つけることができたし、木々の中はとても気持ち良かったです。冬の森は、落ち葉で地面がとてもふかふかとしていました。四季の変化を感じることは、生活をしていく中で大切なことだと思います。里山は身近に季節を感じられる場所であり、私たちの生活ともっと結び付いていくと良いと思います。また、環境問題について考えるためにも、自然の中へ行き、その重要性を感じることが大切です。そのためにも、里山の保全や研究、観察をしていくことが必要だと感じました。まずは里山へ行くことが大切だと思います。

今回、シンポジウムと交流会でたくさんの方と出会い、話をして、里山や自然に対する意識が今まで以上に深まりました。これからも里山に行き、自然や環境についての知識を増やして、その重要性を考えていきたいと思います。龍谷大学の方や先生方、わらや杉を用意してくださった方にはお世話になり、ありがとうございました。

（4）大学間里山交流会に参加して

龍谷大学経済学部4回生　寺本昌弘

交流会はなんと言っても楽しい2日間でした。1日目の瀬田キャンパスで行われた「瀬田山会議　大津の里山の過去と未来」では、龍谷の森のある瀬田の、普段知ることができなかった過去の暮しや姿を知ることができ、大変ためになりました。その後の懇親会では、たくさんの学生や先生と食事をしながらお話ができ楽しい時間となりました。

二日目は奈良県吉野の最高級杉を使ってマイ箸作りをしました。ナイフや鉋で削り、最高の箸を作ることができました。材料を用意して下さった京都女子大学の高桑先生には感謝の気持ちでいっぱいです。マイ箸作りのあとは龍谷の森を散策し解散となりました。本当に楽しい二日間となりました。

（5）大学間里山交流会に参加して

龍谷大学経済学部環境サイエンスコース4回生　大郷隆正

今年の四大学交流会は瀬田山会議から始まりました。この会議では瀬田の江戸時代の

様子など興味深い話を聞くことができて良かったです。夜はみんな輪になっていろんな話をして夜遅くまで盛り上がりました。2日目はしめ縄作りとマイ箸作りを行いました。しめ縄作りは何度かやったことがあるので、きれいなまのが出来上がりました。マイ箸作りは時間が少しかかり、作るのが大変でしたが、作り方が簡単なので上手く出来上がりました。

（6）大学間里山交流会に参加して

国際文化学部国際文化学科2回生　坂　歩美

私は交流会に参加して2回目になるのですが、今回の方がより充実していたように思います。シンポジウムでは、様々な方のこの瀬田近辺の地域の生活や風土についてお話をして頂き、とても興味深く面白いと思いました。また、これらのお話は普段の生活の中では、なかなか聴くことができないので、貴重な体験であったと思います。また次回のシンポジウムも是非参加したいです。

次に龍谷荘での交流では、学生どうしではありますが、最初はとても緊張してしまいました。しかし、京女の方も里山ORCの方も気さくな方ばかりだったので、一度話すと緊張もほぐれ話しやすいなと思いました。私は都合のため、しめ縄までしか参加できなかったのですが、とても楽しかったです。以前にもしたことがありましたので、大丈夫だと思いましたが何だか前よりも難しく感じ、少し不格好になりましたが、自分で作ったのだという達成感や実感があり嬉しく思いました。その翌日になって驚いたのが、しめ縄のために体全身が筋肉痛になっていてちゃんと動けなかったということです。体全身を使うから、しめ縄はちゃんと編むことができるのだなと思いました。その後、実家の藁を使ってもう一度作ると家族皆がとても喜んでくれて、良い事を学んだなと思いましたし、喜んでもらえたことがまた嬉しく思いました。来年の交流会はもっと充実したものにしようと思いました。

（7）シンポジウム感想・しめ縄とマイ箸作りの感想

龍谷大学理工学部2回生　山並康介

12月15日（土）のシンポジウムではスタッフとしてお手伝いさせていただいていたため、お話の方は横田先生の講演と最後の全体質問会を聞かせてもらいました。横田先

生のお話は龍谷の森をスライドを多用して紹介されているものでしたが、龍大生である私が知らないような鳥や植物の名前が沢山出てきました。そしてそれらの美しいスライドや特徴を聞き、自然に対する興味がよりいっそう深まったと思います。また講演の中で特に印象深かったのは、スライドでは枯葉にしか見えないものが虫であるという擬態の説明のとき、会場がざわめきに包まれていたことです。私自身とても面白く思いましたが、講演全体としても龍谷の森に興味を持ってもらえたのではないかと思い、大変うれしく思いました。

全体質問会では、地域の森などに長年携わった年配の方々が中心に質問されていたように思います。あまりこの地域の地理に詳しくない私としては、少しわからない質問が結構あったのですが、いろいろな方が活気づいて沢山の質問をされており、時には質問で無く熱くお話をされる方もいらしたほどでした。これほど地域の環境に対しての意識が高いことに驚かされました。

共存の森関西もこのシンポジウムで活動の紹介のブースなどを展示させてもらいました。いろいろな方がブースを見て、質問をしてもらったことにうれしく思いました。また他の展示物を見せてもらい、私の今まで知らなかった活動などを知ることが出来て、今後共存の森としてどのような活動が行えるかを改めて考えるきっかけとなりました。

その日の夜、大学間の里山交流会の顔合わせでは、高桑先生を始め、京都女子大学や龍谷大学の方々を中心に親睦会を開いてもらい、そこで共存の森のことやきのっこの活動についていろいろと話をすることが出来、またこのような知り合いが出来たことをうれしく思います。

12月16日（日）の体験学習では、しめ縄とマイ箸作りに挑戦させていただきました。マイ箸作りはもちろん、しめ縄も一度も作ったことが無く初めての経験でした。最初にしめ縄作りを行いましたが、うまく作ることが出来るか不安で、むしろ全然うまく作れないだろうと思っていました。しかし作り始めてみるとこれがけっこう楽しくなってきて、ちょっとした職人のような感覚になりました。高桑先生や他のメンバーからも初めてにしてはうまいとのお言葉をもらい、最後まで楽しんで作ることが出来ました。また、しめ縄を作る途中で高桑先生からしめ縄の由来、歴史などを聞かせていただきました。それによれば、昔の稲作文化において次の年の豊作を願うためのものであるとの事でしたが、他にも調べてみたところ、しめ縄には「縄張り」などの意味合いがあるようで、

正月、門松とともに戸口に注連飾りを置くのも、家の中に悪霊を入れず、無病息災・家内安全を願うためのものでもあることを知りました。これほどの縁起の良い文化・風習を今まで知らなかったことが残念でならなかったと同時に、この機会に知ることが出来、さらに作り方まで教わることが出来て大変うれしく思っています。そしてこのように本来不必要となった縄を利用し文化を形成してきたことも、うまく自然を余すところ無く利用する、すなわち自然との共存といったものを感じることが出来たように思います。今まで実家の方ではしめ縄を作って、飾るといった習慣が全く無かったのですが、今度は正月に作ることは難しくとも飾るようにはしたいと思っています。

マイ箸作りでは、あらかじめ用意された細長い材木を荒削りし、箸作り専用のカンナできれいに整えるだけの作業でしたので、しめ縄ほど複雑で難しくありませんでした。ただ、結構な量を削らなくてはならず、慣れるまで何度も削る作業を要することと、それによりかなりの削りカスが出てきたことに驚きました。正直これほどまでに削りカスが出るものと思ってなかったので、もう少し細長い材木で、多くの箸が作れたように思いました。しかし、削りカスも肥料に利用すると聞いて安心しました。これも木を余すところ無く利用し、自然への物質循環を行っている点からも無駄の無いものであり、すばらしいと思いました。

この後、龍谷の森にメンバー皆で入り、バイオトイレに行ったりしいたけを取ったりと楽しく学ぶことが出来ました。今回の活動を通して、このように環境を体を使って身近に感じることが出来たことは良い経験だったと思っています。今後また、共存の森のメンバー全員でこのような交流が出来たら良いと思っています。

（8）大学間里山交流会の感想

龍谷大学理工学部2回生　多胡 潤哉

2007年12月15日に開かれたシンポジウムでは私はスタッフとして誘導や裏方をしていたため、シンポジウムの感想は述べられませんが、次の日のしめ縄作りの感想を述べたいと思います。

普段は自身の所属する団体でのみ活動を行い、環境に関するイベントにも一人で参加することが多かった私にとって、京都女子大学と里山サークル『きのっ子』、そして共存の森　関西との交流会は非常に新鮮なものでした。それぞれが思う環境や自然について

の考えは違えど、同じ年頃の学生が一同に集まり作業を通して心を通わせたことは貴重な体験であったと感じます。

今回は午前中にしめ縄づくりを行いました。日本の伝統文化の一部であり、自然の一部である藁を使ってつくるしめ縄は、日ごろ自然にじかに触れることのない私たち学生の手には馴染みにくく、何度もしめ直しました。藁と触れ合いながら日本の先人、そして現代でもなお藁から縄を編んでいる人たちの手を想像しつつ、自身のやわらかくて頼りのない手を見て少し恥ずかしくなりました。

一つのしめ縄をつくるのに一時間以上かかりましたが、その分たくさん学生さんたちと交流ができたと思います。同じく里山や環境をテーマに活動する仲間同士で笑いありの楽しい時間を過ごすことができ参加してよかったと思います。

（9）大学間里山交流会の感想

龍谷大学1回生　和田静香

まず1日目の里山シンポジウムですが、付近の住人の皆さんが大勢集まっておられて、和気藹々とした雰囲気だったことが印象にのこっています。

シンポジウムの内容は、龍谷大学の自然の話から始まり、世界の環境問題など、多岐にわたって行われていましたが、主に瀬田キャンパス周辺の、昔と現代との自然環境の変化が話し合われていました。その中で、地域住民のみなさんが真剣に講話を聞き、自分たちの周りの環境を良くしていこうと積極的に質問をしていたのにとても心を打たれました。やはり、自分たちがどうにかしなければならないという強い意志こそが、環境を良くするための一番大切な物なのだと気づかされました。

大変勉強になりました。

二日目のお箸作りとしめ縄造りですが、自分で思っていた以上に上手くできたので、とても嬉しかったです。日本の伝統のものを学ぶことは、少し神聖なことのようなきがして、ドキドキしました。まだまだ下手な出来損ないのものですが、お正月には家の玄関を立派に飾ることができました。

教えていただき、ほんとうにありがとうございました。また、材料を譲って頂いた方にも深く感謝しております。　お箸も大事に使わせて頂きます。

（10）大学間里山交流会の感想

里山学ORCリサーチアシスタント　林珠乃

12月16日の活動には、龍谷大学の学生サークルきのっ子と共存の森からそれぞれ11名と2名、京都女子大学から5名が参加しました。

京都市在住の森澄さんがつくられたもち米の藁を使ってしめ縄を作り、吉野中央木材株式会社が提供してくださった吉野杉の間伐材で箸を作成しました。作業は少々時間をオーバーしたものの順調に進み、皆それぞれのしめ縄と箸を完成することができました。

今回行ったしめ縄や箸という伝統的な製品の作成は、ほとんどの学生にとって始めての経験で、完成した製品に至る作業を各々が行い、藁から縄になり、さらにしめ縄になるというプロセスを実際に追うことで、昔の人々の作業に思いを馳せることが出来たと思います。

また、材料となる藁や間伐材を提供してくださった方の近況を、高桑先生が丁寧に説明してくださったので、自分たちの実習が一般の方々に支えられていることもよく理解できました。

2．環境教育関連シンポジュウムへの参加

2.1　『森と共に生きる』 シンポジウムの報告

平成19年5月4日、本シンポジウムに参加し大変感銘を受けたのでその感想を述べてみたい。

****

シンポジウム　『森と共に生きる。～吉野林業の名人から 学ぶ～』

日時　平成19年5月4日　10：00～17：00

特別講演　杉本 充氏（杉の種採り名人）「森と歩む私の人生」

ゲスト講演　高橋 絵里奈氏　（京都大学フィールド科学教育研究センター研修員）

「木を選ぶ目を科学する―除間伐の選木名人垰忠一氏の人工林管理手法―」

ゲスト講演　宮浦 富保氏　（龍谷大学教授 / 里山学・地域共生学ORCセンター長）

「日本の森の歴史と将来」

パネルディスカッション

コーディネーター：吉野 奈保子氏　（NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会事務局）

****

まず、主催団体である「共存の森　関西」とは、どんな団体か簡単に説明すると、「共存の森」とは、2003年に「森の“聞き書き甲子園”」のOBやOGの呼びかけにより始まった高校生、大学生を中心とした森づくりの活動である。HPから引用すると、

『森の“聞き書き甲子園”は「森の名手・名人」との出会いを通じて、人と触れ合うことの素晴らしさ、自然の大切さなどを学ぶ活動です。そして、この経験は高校生たちの心に「実際に体験したことや感じたことを多くの人に伝えたい」、「森や自然について学び守っていきたい」という思いを芽生えさせました。

森に入り、森を感じ、森を知り、森で遊び、そして森について考える……。人と人、人と自然のコミュニケーションをはかることを目的とした森づくり、「共存の森」という活動がOB・OGたちによって始まりました。

関東では、2004年から千葉県市原市にある県有林「鶴舞創造の森」で活動を行っています。夏には全国のOB・OGに呼びかけて、2泊3日で「共存の森セミナー」を開催。各地から約30名のOB・OGが集まりました。記念植樹や下草刈り、間伐を体験。そして、炭焼きの名人に話を聞いたり、キャンプ・ファイヤーを囲んで語り合ったりと、とても楽しいセミナーとなりました。その後も「鶴舞創造の森」は関東のメンバーを中心に、樹木の名札づくりや、植生分布図づくりなどを行っています。

セミナーをきっかけに、関西では、龍谷大学「里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター」（里山ORC）の御協力により、「龍谷の森」をフィールドに活動を開始。

東北では山形県「源流の森」をフィールドに活動を行っています。

私たちは、これからも各地に「共存の森」の輪を広げて行きたいと思っています。

森の“聞き書き甲子園”に参加したことのあるOB・OGの皆さん、そして、まだ参加したことのない高校生、大学生の皆さんも、ぜひこの活動に参加しませんか。ご連絡をお待ちしております』

ここで出てくる、森の“聞き書き甲子園”とは何かと言えば、

〜〜

毎年、日本全国から選ばれた100人の高校生が参加し、2007年度で第6回目を迎える活動。100人の高校生は、長年森と関わり、森とともに生きてきた「森の名手・名人」

100人を訪ね、「聞き書き」を行う。「森の名手・名人」とは、昔から日本人が伝えてきた知恵や技（わざ）を、ご自身の体験や経験とともに先人達から受け継いできた人たちである。

〜〜〜

つまり、我が国の山村の高齢化の進行は、「限界集落」という言葉で代表されるように、すざまじいスピードであり、このまま手をこまねいていると昔からの山村の伝統文化や知恵が次世代に継承されずに消滅してしまう恐れが大きいことに危機感を持ったことが、この運動が生まれた種である。当初は、国が始めたようであるが、現在その活動を継承している母体が、今年NPO法人となった「樹木・環境ネットワーク協会」であり、その理事長の渋澤寿一（農学博士）氏がシンポに参加しておられた。

まだ、「共存の森」関西とはどんな団体かと言えば、2007年度の「共存の森」関西〜活動報告〜パンフレットから引用すると、

2005年3月から滋賀県の龍谷大学瀬田キャンパスにある“龍谷の森”と隣接集落である堂町をフィールドとして活動しています。“龍谷の森”はもともと落ち葉や薪をとったり、こども達の遊び場となったり、生活には欠かせない存在であった「里山」。しかし、いつからか人々の生活とは隔たった存在となってしまいました。“人の暮らしとともにあった里山の姿”とは、どんなものだったのだろう。そんな疑問から「里山と人の繋がり」をテーマに、自分たちに何ができるかを考え活動しています。

〜これまでの活動〜

○定点観察

2005年度から、“龍谷の森”とその隣接地域である堂町で、季節の移り変わりを、毎月同じ場所で写真を撮って記録しました。同時に、“龍谷の森”を毎月散策することで、様々な森の姿を知ることができました。

○聞き書き

2005年の8月から12月にかけて、堂町に住むおばあちゃんのお宅を訪問し、子どもの頃の遊んだ思い出や結婚してからの生活の話、今とは違う昔の暮らしについてなど、様々なお話を聞き、冊子にまとめました。

○関西セミナー

関西のこれまでの活動の中で一番大きなイベント。2005年5月3日から5日に行われたこのセミナーには、関西のメンバー以外にも、関東・東北地区の共存の森メンバーや、初めて共存の森活動に参加したメンバー、昨年度の「森の“聞き書き甲子園”」を終了したばかりの4期生たち、共存の森活動に京美を持った龍谷大学の学生たちが参加しました。初めての関西のフィールドに来たメンバーに向けての“龍谷の森”散策、フィールド乗れk氏を知る田上山の散策、近隣地域の方々との交流イベント、メンバー同士の交流、これからの共存の森についての話し合い等、盛りだくさんの内容のセミナーでした。

○その他のセミナー・イベント

2006年は、堂町の人たちとの繋がりとなった「堂町・湯立て祭」への参加で、堂町の人たちとの親交の深まりを実感しました。

森と水の源流館（奈良県川上村）で行われた「ふれあいデー」では、これまでの活動をまとめ、ブースに展示して、発表しました。また、今回のスペシャルゲストの杉の種採り名人である杉本充さんに実際に『かるこ』を使った木登りを見せてもらいました。

今後の活動について：2007年度は、「堂町ファミリーになろう♪」というテーマを持って、堂町での行事に参加する予定です。それだけにとどまらず、自分たちが中心になって、新たなイベントを企画して行きたいと考えています。

また、奈良の川上村や滋賀の朽木とのつながりも大切にし、さらに交流を深めていきたいと思います。

連絡先：共存の森　関西　代表：河元麻理　〔連絡先 silver_kinton@yahoo.co.jp〕

特別講演『森と歩む私の人生』は、昭和7年川上村で生まれた、今年75歳の種取り名人が話をされた。

最初に、実際に高さが20m以上はあろうかと思われる杉の木に「かるこ」と呼ばれる簡単な道具で木登りをする杉本充さんの様子が映し出された。すごい、軽業である。20メートルの杉の木でも5分程度で登れるという。また、安全ベルトをいままでに既に23個も自作され、他の方に差し上げたということ。映像が素晴らしい、なにか森と人間が一体化して、見ていて気持ちが良い。

川上村は人工林が90%以上の山林地域で、生まれた時から人工林ばかりで育った杉本さんのお話は、経験から生まれた含蓄の深いお話が始まった。

まず、吉野林業がなぜ優良な材を生産している、以下のような3大要因があるという。

1）日照が少ない環境　→　優良材が育つ

2）吉野山域は湿度が高いため　→　堆肥が多く、生育に向いた土壌となる

　年間の降雨量（4000ミリを超える）多し　→　スギ、ヒノキの生育に最適な条件

3）土倉氏の業績がある　→　吉野林業の発展に貢献した元日本三大財閥の一つ

このなかで、日照時間が少ない方が優良な材が生産できるという指摘は,目から鱗という感じで驚かされた。私達素人が考えると、日照時間が少ないのは植物の生育にマイナスと考えがちであるが、逆にそれが杉の生育に取ってはプラスとなる（杉が一生懸命に生長する）という指摘だからである。つまり、日照時間が多いと生育が良すぎて徒長しやすく、かつ乾燥する環境となることから目の詰んだ年輪をもつ優良な材が育ちにくいという指摘である。また、空中湿度が高いという点も微生物が成育するに適した環境となり、土壌中に堆肥が出来やすいという利点となるのである。加えて、年間の平均降雨量が多いことも、杉や桧の生育には好都合である。杉や桧の植林技術に関しては、土倉庄三郎氏の長年にわたる実績があることも、吉野地方の強みである。このように、現場で働いてきた方でなければわからない指摘が多くなされたことは、大変嬉しくこのシンポジウムが大変有意義であった。

シンポ終了後に田中さんが言うには、熊野川の人は当然のように、必ず「杉は北側に植える」という。その理由は南側は日当りが良すぎて杉の生育には向かないらしい。と、聞かされて納得した。散乱した光の方が、満遍なく葉に光が当たりよいということのようだ。桧では、南側では日焼けしてしまい、良くないということらしい。このあたりの知恵は、素人では考え付かない観察にもとずく経験である。

また、優良な母樹から種を採集する必要がある、ともおっしゃた。これは私にも充分理解出来た。遺伝子が良くなければいけないということである。ただし、どうやって優良な母樹を選ぶかは従来は名人芸であったが、次の講演者である高橋絵里奈氏の研究から、要するに木の上部にしっかりとした陽樹冠を形成した樹がいいということらしい。

光合成をきちんと出来る樹冠があれば、種子形成もうまく出来るということであろう。

「山には不思議が多い」とか、山が怒り出したら速やかに撤退することが鉄則である、と杉本氏は述べられた。また、タバコは体にも良くないし、山火事の原因にもなるから、と何人もの方にきっぱりと止めて頂いた。と、きっぱりと断言されたのは、実に迫力が会った。実際、天候がよければ山は大変楽しいものだが、いったん荒れたら大変な目に会うことを実際に何度も体験された方であるから、このようにいえると思う。

「自分は学問がなく、理論的な話がうまく出来ないので」といいながら、「人間と逆呼吸する森は、酸素を生産し二酸化炭素を吸収してくれるので、大切にしないといけません。このままでは、日本の森は大変なことなります。」と述べられた。杉本さんの朴訥とした話には、なぜか心から頭が下がった。

次は、高橋恵理奈さんの研究成果である。

「除間伐の選木名人、垰（ありづか）忠一氏の人工林管理法」を科学的に解明したお話であった。詳しい説明は省きますが、要するに名人が木を選んでいた目安は、樹冠がしっかりと形成されるように回りの樹を間伐していたこと、また年輪幅が一定になるように樹冠を形成させる施行をされていたということが科学的な調査分析でも確認されたという発表でした。

高橋氏の科学的なデータにもとずく選木は、名人から90点もらったと述べられた。このような研究成果に基づいて、これからは名人芸に頼らずに、ある程度マニュアル化が可能となったことは素晴らしい。

最後に、里山ORCのセンター長である宮浦富保氏の講演は実に素晴らしく、参加した私を含めて3名の里山ORCスタッフは危うく高校生の面前で涙を見せるところであった。テーマは、「日本の森の歴史と将来　～マツとスギの興亡～」である。

日本の潜在植生図から、日本列島は常緑と落葉広葉樹林帯でありアカマツはもともと、痩せた尾根筋ぐらいにしか生育していなかったこと。また、6500年前の鳥居浜遺跡の土木木材や、2000年前の登呂遺跡にもマツは含まれていない点を指摘され、魏志倭人伝にもあるように本来日本にはマツがなかたらしい。

ところが、製塩には最終段階で大量の薪が必要なこと、製鉄にも必要なたたら炭を焼

いたこと等と、花粉分析によるデータから、1万年前にはトウヒが多く照葉樹が人間活動とともに減少して、アカマツやクロマツが増えたことを示された。その後、人間が必要としたアカマツは燃料革命で放置され、マツノザイセンチュウを運ぶマツノマダラカミキリによるマツガレ病が蔓延し枯れてゆく歴史をたどった。

スギについての歴史的考察はなかったものの、要するに人間活動とともにマツは増え、また減少していっていることを示された。十分納得出来るお話ではあった。

最後に、自分史の話がありこれがこの日の圧巻であった。ぜひ、もう一度里山ORCのメンバーを対象としてお話をして頂きたい内容であった。

宮浦さんは、天竜川支流にある山間の谷間に生まれ、小学校は複複式の授業で、片道2キロを毎日あるいて中学に通われた。という、杉本充さん以上の原体験をされていることに驚いたことは言うまでもない。その、毎日通ったという道は、お姉さんはクマに会われたが、自分は会っていないという、まさに山里の細い谷沿いの道である。おもわず、唸った素晴らしい古道然とした道である。

生まれ育った家がある谷間は、朝10時にならないと陽が差さず、午後2時には日が暮れるという場所にある。どうして自分の親父がこのような辺鄙な場所を選んだかを、地形図と航空図で分かりやすく解説された。

要するに、むかしは山間の方が生活が楽に出来たということである。焼畑農業と多品種の食料がある山間にこそ人は住みつくのである。水田耕作が可能となり、人口増加が見られたというが、東北地方では水田に依存していた村落が飢餓に見舞われ、山間集落ではそのような飢餓は発生しなかった言われているようだ。

いずれにせよ、里山学を取り扱うに際して、宮浦氏の自分史と絡めた解説は阪本先生のお話にも勝る迫力があり、皆さんにぜひお聞かせしたかった内容です。

シンポ後の懇親会は、学生達が自己紹介してくれたおかげで、大変楽しいものとなったが、このような活動が行われていることをほとんど知らされていなかったというのは、いささか困惑した。確かに、一昨年度の里山ORC報告書（p.153）をみると「共存の森」活動との連携が報告されている。が、同じ龍谷の森を活動の場としている他の組織や団体とも交流していただけたら、もっと良かったのにと考えたのは私一人ではないはずである。

今後は、里山ORCの各種の交流会同士の連携を密にする作業が強く求められると感じ

つつ、帰りのバスに乗車したのは午後8時36分であった。

2003年を境として、日本の若者達がこのような形で里山に関わって来ていることや、またそれを大企業（富士フイルム、トヨタ等）が支援していることは大変心強い流れである。さらに加速するための様々な仕掛けがなければ、高齢化している日本の農村や山村が崩壊するのは時間の問題であろう。

2.2　日本学術会議主催「環境教育：明日への提言」シンポジウムの参加報告

平成19年12月7日にシンポジウム「環境教育：明日への提言」に参加したのでそれについて報告する。

―――――――― シンポジウム「環境教育：明日への提言」の案内 ――――――――

シンポジウムの開催趣旨；21世紀に入り、温暖化をはじめとする地球環境問題が深刻になり、環境教育の役割がますます重要になってきました。本シンポジウムはこうした状況を踏まえ、我が国における環境教育に関連する各セクターが集合し、環境教育の今後の方向性を討議し、環境思想・環境教育分科会が目下検討中の「政府への提言」の必要性・緊急性を広く社会へ向けてアピールすることを目的とするものです。

【日にち】平成19年12月7日（金）　13:00～16:30

【場　所】日本学術会議講堂

【プログラム】　総合司会：鳥越 けい子　（環境思想・環境教育分科会幹事／聖心女子大学教授）

○13:00～13:10　趣旨説明　進士 五十八
（日本学術会議環境学委員長、東京農業大学教授）

○13:10～13:40　セッション1：環境教育の展開・現状・課題
報告者：小澤 紀美子（環境思想・環境教育分科会委員長、学芸大学教授）

○13:40～14:10　セッション2：環境教育の本質と条件
報告者：鬼頭 秀一　（環境思想・環境教育分科会委員、東京大学大学院教授）

○14:10～14:40　セッション3：環境教育推進のための政策
報告者：岡島 成行　（環境思想・環境教育分科会副委員長、大妻女子大学教授）

14:40～14:50　休憩

○14:50～16:30　ラウンドテーブル　提言：明日へのアクションプラン

参加団体：日本環境教育学会、日本野外教育学会、こども環境学会、日本環境教育フ

ォーラム、持続可能な開発のための教育の10年推進会議、行政担当者、企業、その他

コーディネーター：進士 五十八

【主催】日本学術会議　環境学委員会環境思想・環境教育分科会【共催】日本環境教育学会、日本野外教育学会、こども環境学会、社団法人日本環境教育フォーラム　【協賛】トヨタ自動車株式会社

このシンポジウムは、21世紀に入り環境教育の役割がますます重要になってきた状況を踏まえ、我が国における環境教育に関連する各セクターが集合し、環境教育の今後の方向性を討議し、環境思想・環境教育分科会が目下検討中の「政府への提言」の必要性・緊急性について公開討議し、広く意見を求めてゆく目的できわめて時宜を得たものであった。

「環境教育の展開・現状・課題について」は小澤紀美子（環境思想・環境教育分科会委員長）が、「環境教育の本質と条件」については鬼頭秀一（東京大学大学院教授）が、「環境教育推進のための政策」についてラウンドテーブルがもたれ、各セクターの代表者がコメントをし、教科として「環境」をもうけるとか、幼・小・中学校での自然体験の義務づけなど、具体的な提案について活発な意見交換が行われた。

学術会議はこのようなシンポジウムを公開することは、これからの我が国の環境教育の推進が各種の法律でも求められているが、教育改革を強く意識した方向性を示した有意義なシンポジウムであった。

さいごに

12月15日に開催された里山シンポジウムには、勤務校でも公開講座が開かれため大変残念ながら参加できなかった。その代わり15日の晩から龍谷荘に学生達と泊まり込み、色々と学生達と話をする機会が出来た。今の学生達は大変ナイーブでありながら、それぞれの立場で何とか環境問題に取り組みたいとの意識は感じられるが、具体的な取り組みをしている学生はほとんどないのが現状である。

学生達に様々な直接体験を継続して行わせる機会を与えることが大事ではないかと考えている。一過性のイベントではなくて、小さなことでもいいが自分でも出来ることを経験させて自信を持たせる機会が少ないように思われる。今回も、しめ縄づくりという

小学生でも出来そうな体験活動を行ったが、彼らなりに初めての体験であり筋肉痛になるほど夢中で取り組んでいた。どの学生も最初はなかなかうまくは削れないが、内丸カンナを使用することで、おもしろいように箸が丸く形作られる様子に感激していた。

日本人の食器である箸を手作りできることに驚いて感激する姿を見ると、こちらも嬉しくなる。日本の伝統文化というと難しく考がえがちだが、毎日の食事で使う杉の箸を自分で作り上げることは、学生達にも貴重な体験である。

杉の箸は、軽くて、使いやすく、いい香りがするので、一度使い始めるとほとんどの人は好きになる。現在、250億膳もの割り箸が我が国では使用されており、その98パーセントが中国産であるという。このような現実をどのように考えたらいいのか、「割り箸づくり」体験を入り口として日本の林業の現状（林業政策）についても考えさせたい。環境インターンシップとして林業の現場を学ぶプログラムを「箸一本の革命」と名付け、新しい環境教育の教材開発として取り組んでゆきたいと考えている。

早いもので、この大学間里山交流会（交流ネットワーク）も4年が経過して、参加大学も4大学から6大学へと広がってきた。「森を持った大学」は今後ますます連携を深めてゆく必要があろう。体験型、実践型の環境教育の重要性が全国の大学でも認識されてきた。教養教育の一環として、里山を活用した環境教育が定着してゆくことを期待している。その意味で、先駆的な取り組みを初めている私達もさらに検討を深めて、大学生のより積極的な参加と理解を深めるにはどうしたらいいか、大学のカリキュラムの工夫が必要である。

京都女子大学・京都女子大学短期大学部では平成20年度から、従来の総合教育科目を基礎・教養科目へと変更し新しい教養教育がスタートする。後期から開講予定の「生命環境教育論」（既に、5年前からコンソーシアム京都で集中講義の形で他大学の学生を対象にして初めている科目（カラーページ p.32　写真6参照））という授業の中で、本学に隣接する「阿弥陀ヶ峰国有林（13ヘクタール」）」を活用する予定でいる。この自然観察路が出来ている国有林は「京女鳥部（とりべ）の森」と命名し、林野庁や京都市とも連携しながら環境教育活用力を身につけさせるフィールドとすることを考えている。　奈良県吉野郡川上村で達ちゃんクラブを10年間実践されている辻谷達雄さんは「山は学校だった」という本を出されているが、座学だけではなく森林や野外での直接体験活動からいろい

ろなことを学生達に学んでほしいと考えている。若者達を少しでも森に近づけてゆく努力をしなければ、本当の環境教育は始まらないと考えているからである。

持続可能な社会を実現するため、自然が作り出した太陽光利用システムである森林の働きと、人間が考え出した人工の太陽光発電システムについて学ぶことで、バランスの取れたエコマインドを身につけた環境活用力を持つ学生を育てていきたい。これこそが持続可能な発展のための環境教育、すなわちEDSのモデルになると考えるからである。このような環境活用力を身につけた学生を「森と太陽の案内人」として認定してゆきたい。

これからは、石油に依存しない社会（脱石油社会）の実現に向け、二酸化炭素を排出しない太陽光発電、風力発電、地熱発電、潮汐発電等のクリーンエネルギーの利用促進、地域に根ざした安全な食料生産（出来れば無農薬・無化学肥料・無耕起の自然農法等）、安全で健康的な家造りとリンクした林業政策、地域に根ざしたエネルギーシステム（木質ペレットの生産と利用等）の構築等、色々な事柄がつながりあっていることを学ばないと一筋縄では解決が困難な地球環境問題に取り組むことは困難である。少なくとも石油に依存したエネルギー多消費社会となった日本を、低炭素社会へと移行するためには、上に述べたような色々な手法や行動で解消する方策を考えてゆかねばならないと考えている。

あまりにも便利で快適すぎるエネルギー多消費社会を作り上げた私達団塊の世代の社会的な役目は、高齢化・少子化社会に適合した穏やかな低炭素社会の実現を目指して、若者達の活躍が出来る場を作り上げてゆくことはないかと考えている。そのための持続可能な生態系である里山を活用した生命環境教育をこれからも続けてゆきたいと考えている。

参考文献

1）割り箸はもったいない？（2007）田中敦夫著　ちくま新書
2）ニッポンの森林再生（2007）田中敦夫著　PHP新書
3）割り箸が地域と地球を救う（2007）佐藤敬一・鹿住貴之著　創森社
4）“林業再生”最後の挑戦（2007）天野礼子著　農山漁村文化協会
5）山は学校だった（1998）辻谷達雄著　洋泉社